

ナスルッラーのペルシア語訳『カリーラとディムナ』

「第三章 数珠かけ鳩」の考察

—アラビア語訳とペルシア語訳・英語訳の違い—

加藤 純子（中東文化研究家）

本稿の初出は言語と交流研究会編集『言語と交流 第23号』令和2年発行、75ページ～85ページであることをお断りいたします。

(1) はじめに

『カリーラとディムナ』は釈迦以前から存在するインド起源のサンスクリット語の説話集『パンチャタントラ（5章の物語）』にもとづく物語で、その名は原典の初めに登場するカラタカとダマタカという2匹の豹に由来する。この説話は東西60カ国語に翻訳され、ほぼ200種のテキストがある。西欧では『ビドパーイの物語』（ビドパーイは人名）とも呼ばれる。そして東西の説話文学に多大な影響を及ぼし、世界文化交流史及び世界文学史上、重要な地位を占めている。

本稿の『カリーラとディムナ』はムカッファイによるアラビア語版¹⁾を原著とするナスルッラーによる訳のペルシア語版²⁾である。筆者はペルシア語から日本語への翻訳を進めている³⁾が、ムカッファイのアラビア語版とこのナスルッラーのペルシア語訳・英語訳⁴⁾の同一部分を比較しながら翻訳によって文全体の中でのその箇所の意味がどう変わるかについて考えてみたい。アラビア語訳は、淡々と物語が進行する。それに対してナスルッラーのペルシア語訳はクルアーン（日本では一般的にコーランと言われている）やハディース（使徒の言行録）が入っていたり、アラビア語の詩が入っていたりするがこれは何を目的としているのだろうか。英語訳も新たにナスルッラーの加えた所は入っていない。黒柳（1979）⁵⁾は「ナスルッラーの訳はアラビア語の必ずしも忠実な訳ではなく、原文に拘束されず、全般的に見て自分の好みに応じてかなり伸縮自在な訳をしたと言えよう。」と述べている。英語訳の前書きにThackston⁶⁾はナスルッラーによる『カリーラとディムナ』の翻訳について15世紀ティムール朝時代のカーシフィーによるペルシア語訳『アンワーリスハイリー』と比較して次のように述べている。

ナスルッラーは、彼のペルシア訳をかなりアラビア語化された語彙を使い、カーシフィー⁷⁾に言わせれば「冗長にして美しく装い過ぎている。」彼はしばしばア

ラビア語の語彙を例えの文に比喩的に、その言葉の普段の意味から遠く離れた意味——特にペルシアで普通に持っている意味と違う——で使っている。私はこれらを現代の英語で表そうと努めた。しかし与えられたナスルッラーのやり方で、ある言葉に特定の意味を固定させ、その作品すべてにわたり同一の翻訳を充てることは不可能だった。ナスルッラーのペルシア語の原文に装飾したアラビア語の詩の引用を省くことが翻訳にとっては自然だった。しかしそれはそうとしても、それらはすぐにでも主題になるかも知れないにもかかわらず、それらはまれに翻訳にとって良い響きとなることはほとんどなく、またはつきりしないとかつまらないと結論づけるものであった。カーシフィーはアラビア語の行は全部省略した。たぶんなぜなら、彼の文化・言語的環境の中ではそれらを理解できなかっただろうし、そのかわりに彼自身の多くのペルシア語の詩を付け加えた。原文の中のいくつかの箇所はまた解くことのできない問題もあった。それらはカーシフィーによって全部消された。このことは原文の中のこれらの場所はすでに彼の時代においては間違いの多い場所だったのである。

本稿は、アラビア語訳とペルシア語訳との違いについて「装飾」「特別な意味」「他の詩の追加」などの視点でペルシア語版の特徴を明らかにしたい。

(2) 『カリーラとディムナ』「第3章 数珠かけ鳩」の日本語抄訳

なお本稿のペルシア語版抄訳ではナスルッラーが付け加えた部分を□で囲んで示すこととした。そのほうが省略したものよりペルシア文学らしいものが出て来るかもしれないと考えたからである。

ネズミは言いました。「一緒にいることの理由がわかりません。そして交際の道が遮られていること、そして賢者たちは手に入れることがあらゆる理由で困難であるものを手に求めようとする正しいとはみなしません。賢者たちは自分たちのことを無知という恥ずかしいことから守られているように、彼らの自分たちの知恵が経験ある人の目に欠点が見えないように。なぜなら陸の上に船を走らせることを望み、海の水の上にアラブ馬を走らせたいと思う人はだれでも自分に対して笑っているでしょう。なぜなら賢者たちの行いが遠ざかっているからです。

①

詩 海の中に墓を掘る。
船を荒野の中に持つ。<ペルシア語>

「私とあなたの間の友愛の道はどう説明すれば開かれることができるのでしょうか？なぜなら私はあなたの餌です。私はあなたの欲望から守られて生きることはできないのです。」

カラスは言いました。「自己（の理性）で良く考えてください。なぜなら私にとってあなたを苛むことでどんな利益があるのでしょうか。あなたを食べてどう満腹になるのですか？あなたがいつまでも生きていること、あなたの友情を得ることが私にと

って手をとって助けてくれるもので良いものなのです。世の災いにおいて、あなたの約束と寛大さ、あなたの性質のやさしさはこの時代の様々な不幸の中で助けてくれるもののです。そして寛大以上にふさわしいものはありません。あなたと親しくしたいと願い長い道程を後にして来ているというとき、あなたが私から顔をそむけること、拒絶の手を私の胸の上に置くことはふさわしくなく、なぜなら良い行い、清らかな心の内にこの世の変転を示してくれました。

あなた自身の技量が決して隠れたままではいませんでした。もし余り示されないとしても麝香のそよ風がいかなる説明によっても覆い隠すことはできないのです。それを隠しておこうと努力がなされます。たとえあまり目に見えなくとも麝香のそよ風のように、いかなる方法によっても覆い隠すことはできず、隠しておこうと努力しても外に出て世界を芳しくします。遂には道を見つけて世界を香り高くします。

②

詩 松明を手に持ち麝香をえりに入れていることができない。

<ペルシア語>

そしてあなたの素晴らしい人徳には、はるばるやって来た権利を無駄にして私を失望させ、これから引き上げさせ、そしてあなたの友情という幸運から禁じることはそぐわないのです。

「いかなる敵意も本能から来る敵意にはかないません」とネズミと言いました。「なぜならもし2人の者に互いに敵意が生じていたら、そして時とともに相手からそれを強いてまでその古いものと新しいものが結び付き、先にあつたものが後から加わったものと一緒にになっていたら彼らがいなくなる前に、それが断ち切られることは起こらないでしょう。それがなくなる、その本質（ネズミがカラスと敵対すること）が消滅することに属しています。その敵意は2種類あります。ひとつはライオンと象の間に生じ、それによるものです。それは彼らの出会いでは戦いがないことはありません。そしてこれもまた各々の悲しみを受ける可能性があります。すなわちそこでは勝利が一方に定まってはいません。そして負けることが一方に限られているではありません。ある時はライオンが勝ったり、ある時は象が勝利したりします。そしてこの種の敵意は根絶される、あるいは策略とごまかしによって処理できない程、根深くはないのです。もうひとつはネズミとネコ、そしてカラスとトビの間の敵意です。つまり親しく付き合うことが決して称賛されないものです。一方が確実に命を落とし、他方が確実に勝者となります。逆のことが起こった前例もなく、将来も決して起こり得ません。どうやって和解を心に楽しく説明できるのでしょうか？過ぎゆく日々はその新鮮さを奪うことはできません。そして彼らはそれを手に取ることができます。そして、否、昼と夜の相違や、それを国難の周囲（根拠のない結び目）に空想的に変えることができます。そして損害と難儀は一方の側のみ受け、他方の側は休息（安らぎ）と利益を楽しめます。

③

私たち（人間）があなた（神）を愛していて、かつあなた（神）が私たち（人間）

を愛している時、私たちがあなたを非難していることを知っている。(裏では悪口を言っていることを知っている) <アラビア語>

本物の敵意は語られたように、はつきりとした場合、和平は想像には埋まってはいません。もある苦労がなされるとすぐにその柱がバラバラになり元通りに戻っていきます。そして欠点のないことに騙されたことが明らかにされます。賢者の確信というものはその基盤が決して堅固にはなりません。水がたとえ遅いまとどまても、においや味が変わります。火に注がれた水のように、消すことはできないのです。特にそれに騙されることが何らかの恥を避けることはできないのです。もし何らかの水が香りや味が変わるものまで器の中はずっと入っていたとしても火の上にその水が注がれればそれを消すことに無力にはならないのです。つまり火を消します。水がたとえ温度が上がっていても本性は変わらないのです。敵との和解は蛇と男の話と一緒にです。寒さに凍えている蛇を助けて袖の中に入れて、袖の中が温かくなったら蛇が元通り元気になってかまれた男の話と一緒にです。賢者にとっては抜け目のない賢い敵に対して、どのように友情があり得るでしょうか?

カラスは言いました。「英知の源から生まれた言葉を聞くことは必ず利益があるでしょう。しかしながら寛大さと高貴さと人間性と勇敢さによって、以下のことがふさわしいです。つまり自身の自由が命令することに従いなさい。私たちが友だちになれないなんていう馬鹿げた考えは忘れてください。」

④

我らの間、ともにある道は歩かれていません。<ハディース>

というハディースを無視して仲良くなりましょう。偉大さとの条件とは、良い親切が道を探させること、こうすることがよりふさわしいということを知りなさい。

「賢者は言います。愛情のこもったそして善を尽くす人同士の友情は早く強固になり、なかなか切れません。純金で作られる器がなかなか壊れないように。そして壊れても早く直るように。また堕落した者たち、悪人たちの間の友情は遅く固まります。(友情はなかなか固まりません。) すぐに友情は気がないものになります。素焼きの器のように、すぐに壊れて決して修理されません。友だちに寛大な心の人は、一回の会見と一日知り合うことで種々な慰めと憐れみを持とうと考えるでしょう。お互いを友と認め合うのです。逆に、卑しい人についてはたとえ古い親愛が保証されても、大きな希望あるいは恐怖をもたない限り、彼についてゆくことはできないのです。あなたの寛大さの印は明らかであり、私にあなたの友情が必要です。そしてこの扉の所にじっとして居て、もちろん私は帰りません。何の食物も味わいませんし、飲み物も飲みません。私はあなたの友としてあなたと仲良くすることと、兄弟のように親しくすることを真剣に誓います。私は喜んであなたの友情を受け入れます。」ネズミは言いました。「私が最初にあなたの申し出を断ったのは、もしあなたが私を裏切ったなら、あなたとの友情関係を解消して自分を餌にされないようにするためです。(もしあなたが裏切ったら自分の所で重荷を背負い込まないで済むように。) そして言わないでください。「簡単な轡(くつわ)と弱い手綱で友情を手に入れたとは。でなければ、私の信条では願

いを拒むことは許されないことです。特に求める人が私の友情を自由意志から求めた時には。」

⑤

予測できない場所から来た時に、非難の持ち主に対して「ようこそ。」と語るものである。<アラビア語>

その後、ネズミはそれから穴の出口に出てきました。カラスは言いました。穴の外に来て、「何が私に会って親密になることを妨げているのでしょうか？何で私と親密になれないのでしょうか？まさかまだためらい（疑い）が残っているのではないでしょうね。」ネズミは言いました。「この世の人は親しい友を求め、その交際利益から自分たちのものになる大変大切な魂、もの凄く大切な命をその交際に捧げます。利益とそれから得られるその祝福恩恵が日々のためにいつまでも続くように、大切な魂と重大な命を彼らが得られるようにするときはいつでも彼らは真実の友、誠実な兄弟でありましょう。状況の処断とその時の規則を遵守するために親切は必要であるとみなし、この世の様々な事柄の利益を手の内で守る人々は獵師たちのようです。どんな獵師かというと自分自身の利益のために穀物の粒をまき、鳥の空腹を満たすためにまくのではないというような獵師のようです。だれかに対する友情に喜んで命（心）を与える人の方が単にお金（手）を犠牲にする人より良い友だちです。

⑥

自分の命を懸ける気前の良さというものは気前の良さの目標の極限にあるものである。<アラビア語>

明らかなことですが友情を受け入れ、あなたの友はあなたと兄弟のように付き合い始めることは、私にとって命を危険にさらすことになります。もし何らかの悪い推測が生じたなら決してこの願望（友達になること）が生じなかつたでしょう。しかしあなたの友情について強く信頼するようになりました。そしてあなたの誠実さを私の友情が求めるのは疑うまでもなくなっています。そして私の側からすればそれ（その気持ちについてもっと多くに等しいものがあります）に関して弱さと向き合っています。しかしあなたには友だちたちがいます。彼らの属性は私に対立することに関してはあなたの属性と同じです。彼らの意見と、私との友情についてのあなたの考えとは一致していません。彼らの内のだれかが私を見て何か企みを考えるのではないかと私は恐れています。

カラスは言いました。「友達の友情の印はこのようなものです。つまりその人の友に対しては友であり、敵に対しては敵であるというのが友人の証です。あなたと私の間でかくも友情の土台は強化されて私の友人である人はこういう人です。あなたを苦しめることを慎み、あなたの満足を求めていることを義務と心得る人が私の友達になり得るのです。」「私のものでは何ら危険はありません。あなたと結びつかないものとは離れ、あなたに対する敵意から我が身を断ち切ろうとする人と一緒になります。人の意志にはそれがふさわしいことです。それとは体の見張り人であり心の翻訳者である目と舌が何等かの対立と認識を持ち一つの支柱でその両方を使えなくします。そして

そのやり方に何か苦しみを覚えたとしてもそれを安らぎのように考えることが人の意志についてはふさわしいことです。

⑦

自分の命を懸ける気前の良さというものは気前の良さの目標の極限にあるものだ。
<アラビア語>

⑧

<ガズナ朝の詩人サナーイーの4行詩の320番第3,4が引用されている>
あなたの身体の一部がもし敵と友になれば
敵を二人と数え、刃を二本抜いて傷を二本与えよ。<ペルシア語>

優れた庭師は、もし香りの良いめぼうきの間に良からぬ植物を見つけたなら、取り除くのを習いとしていました。⁹⁾ 心を強くしたネズミが外に出て来てカラスに熱心にご機嫌を伺いました。二人ともお互いに会ったことを喜び合いました。

数日が経った時ネズミは言いました。「まさしくここにあなたが暮らして家族や子として連れてくるなら、寛大でなくなることはありません。(とてもありがとうございます) (カラスの) ヘジラ(移住)に対する感激が倍増するでしょう。この場所は完全に素晴らしいところで、心を開くような場所です。」カラスは言いました。「まさにその通りです。この場所のすばらしさはいうまでもありません。

⑨

つまり私というのはもし私の左手が私を裏切ったとしても私の右手は決して左手には付き従っては来ないような人物である。すなわちその左手を切り飛ばしそして私の間で右と左でこのように言うだろう。私を恋しく思うものを恋い、恋焦がれてくるものを私も恋焦がれるのである。<アラビア語>

⑩

牧草地であって星たち(土星と金星)ではない。<ことわざ>
ラクダが食べるのに大変良い牧草地だけがラクダ向けの場所ではなかった。放牧地は牧草地だ。その周囲にはほころんでいる花・笑っている花がいっぱいである。その地は輝く星でいっぱいの天のようだった。
あたかもそのカミツレは清浄な口元のようだった。
胸のゆたかなお嬢さんたちがカミツレに対して笑っている口元のようだった。
<アラビア語>

⑪

クロノグサとカラシウスの花の牧草地は
宝石売りの小屋のようだった。<ペルシア語の詩>

私の友人のカメがそこに長年住んでいます。私は食べ物をその周りで沢山手に入れることができます。また、この場所は道に接しています。突然道行く人々が何らかの害を被るでしょう。もしあなたが望むなら、そこに行きましょう。豊かさと安全の内

に日々を過ごしましょう。ネズミは言いました。

(12)

あなたの大地の中にこそ必要なものがあって、
あなたの愛情の中にこそ求められているものがある。<アラビア語>

「あなたとの交際とあなたとともにいること以上のどんなの望みが匹敵することができるのでしょうか？あなたに対して同意すべきと思わないならば私はどうするのでしょうか？この場所を選んで来たのではないのです。私の話は長くて、びっくりするような話が沢山あります。（今はまだ話せません。）どこかに落ち着き先が決まつたら話しましょう。

カラスはネズミのしっぽを取って目的地に向かいました。カメがそこで、彼らを遠くから見ました。恐れて水に潜りました。カラスはネズミをゆっくり宙から地面に下ろし、カメに声を掛けました。カメはすばやく外に出て久しぶりの無沙汰の挨拶をしました。どこから来ましたか？どうしたのですか？と尋ねました。カラスは自分の話——その時の事柄——ハトたちの後について行って彼らを解放するためのネズミの素晴らしい忠誠心を目撃しそしてこのように思い切って友情の礎が互いに固められ、數日間一つ所にいたがそれから彼女を訪問する決意をしたのだということ——を彼女に話しました。カメはネズミのことを聞きネズミの誠意ある忠誠心、完全な義侠心を理解しました。できる限りふさわしい敬意を払わなければならないと考えました。そして言いました。「私たちの幸運があなたをこの地へ届けてくれました。それをあなたの本質的な美德と素晴らしい性格によって飾り立ててくれました。

(13)

地上にはいろいろな国がある。<アラビア語>

(14)

太陽は頭を私たちの屋敷から登らない。
私たちの屋敷の入口から入って来ない限りは。<ペルシア語の詩>
[あなたが来てくれてうれしいとカメは言っています]

カラスはこれらの話を語り、カメから親切を示された後ネズミに言いました。「もしあなたがあの話——前にネズミが私に話してくれると言った話——を理解してくれるのなら良いと思いますから。カメも聞いてくれるように。なぜならあなたへの友情における彼女の立場はまさに私のものと同じなのですから。ネズミは初めて話しました。

(3) 分析

この抄訳（2）では、原文のアラビア語訳からナスルッラーがペルシア語訳で追加した箇所を①～⑯と示した。□で示した所の解釈——あくまでも私見ではあるが——を以下に示す。

①具体的に「海の中に墓を掘る」「船を荒野の中に持つ」ことはだれにとっても不可能であることを言って、カラスとネズミが友だちになるのは不可能なことだ正在する。

- ②ペルシア語の詩によって、「麝香の香り」が隠し切れないほど良い匂いである、つまりネズミの人柄の良さは隠しても隠しきれないと言っている。
- ③アラビア語の言葉で、神と人間の関係——すなわち人間が神の悪口を言っても神はそれをご存知の上でなお人間を愛すること——を使って、カラスとネズミが友だちになることは難しいけれどできることだと言っている。
- ④アラビア語の言葉で、カラスとネズミが友だちになることは、他から言われたことではなく、自分の心（ネズミの）で決めしたことだから是非友だちになろうと（カラスが）言っている。
- ⑤アラビア語で、ネズミがカラスの友情をなぜ受け入れたか、つまりカラスの言うことを本当に理解して命がけでネズミとの友情を望んでいることをネズミが理解したことを示している。
- ⑥アラビア語で、友情とは自分のために鳥に餌を撒く獵師とは気前の良さということ点で究極的に違っていて、カラスはネズミとの友情のためには命をも惜しまない覚悟で友だちになりたいと言っている。
- ⑦アラビア語で、本当の意味での友情とは友の友は友であり、友の敵は敵であることを示している。つまりカラスがネズミの友になれば、他のカラスはカラスの敵になると言っている。
- ⑧ペルシアで有名な詩人サナーイー¹⁰⁾の言葉を使い、⑦と同様である。カラスはどんなことがあってもネズミの味方になると言っている。権威を付けるために三大詩人の1人の名前を出したのかもしれない。
- ⑨アラビア語で、特に最後の所で、恋しく思うものを恋い、恋こがれてくるものを私は恋焦がれる、そういうものが友情である。だからカラスはネズミを深く愛するのであると言い換えている。
- ⑩アラビア語のことわざで、住むのに素晴らしい場所とは食べ物があるということだけではなく美しい花が咲き、景色の良い場所であること、つまりカラスは住むのに素晴らしい所は良い友だちがいる環境だと言い換えている。
- ⑪アラビア語で言った後、今度はペルシア語の詩で⑩と同様のことを言っている。さらに強調している。
- ⑫アラビア語で、本当の友だちとは愛情を持っている人のことだと言ってネズミにもカラスと同じように愛情を持ってほしいと言っている。
- ⑬アラビア語で、素晴らしい友だちにはいろいろな人がいると言って、カラスが見た「ネズミがどういう風にして数珠かけ鳩を救ったか」をカメに話す。
- ⑭ペルシア語の詩で、今から本当の友だちになりましょうとカラスはカメに呼びかけている。

以上の結果から、ナスルッラーはまず原文をペルシア語に翻訳してその後にそれに近い意味の詩などを挿入したことがわかった。そうすることによって原文の意味がより明瞭になりその時代のペルシアの読者も共感できるようになったのであろう。つまりナスルッラーは原文の筋は変えずに、表現をその時代の人がわかり易いようにハイエースやことわざやサナーイー¹⁰⁾のペルシア語の詩やアラビア語の詩などを入れてい

ると思われる。また、言葉を変えて同じ趣旨を繰り返して友情のすばらしさを強調しているように見える。そして美しい花の名前を出して、出てくる景色が正に目の前に広がっているように表現している。特にペルシア語の箇所はこれ以上美しい花の表現はできないと思わせるようなペルシア文学の特徴である華麗な表現になっている。そしてその時代に尊敬されていた人の言葉を付け加えて物語をより高める効果があったのかもしれない。

(4) 結論

今回の試訳ではナスルッラーが挿入した箇所を区別して表示した。また、挿入部分の考察により、なぜそのような挿入が行われたかその意図を推察した。本稿の結論として、「カリーラとディムナ」3章においては人にとっていかに友情の大切であるかが書かれている。ペルシア語訳については原文のアラビア語訳以上にその友情の大切さを強調しようとした。ナスルッラーはまずアラビア語の原文をペルシア語に翻訳してその後にそれに関係のありそうなアラビア語やペルシア語の詩などを挿入して当時のペルシア人にもわかり易くしたようだ。その強調はペルシア文化に特有のものか、ナスルッラーの独自の考えなのかは今後の検討にゆだねる。

【謝辞】ペルシア語の翻訳のご指導を頂いた渡部良子先生（日本大学非常勤講師）及び檜晶先生（アラビア語塾塾長）に深謝します。

注

- 1) ムカッファイ著、菊池淑子訳『カリーラとディムナ』、平凡社東洋文庫 1978
アッザーム版アラビア語訳——アラビア語訳の原本での中でも一番古いと言われるシャイホウ版より 100 年以上早い 1221 年の日付を持つ写本で、綿密な比較検討と慎重な工程のもとに 1941 年カイロで翻刻されたもの——を原本に使った。
- 2) Monshi, N. “Kalila va Dimna. Corrected by M. Minavi” Amir Kabir [In Persian], Tehran, 2014
- 3) 加藤純子「ナスルーラのペルシア語訳『カリーラとディムナ』」「第三章 数珠かけ鳩」日本語抄訳」、『言語と交流』、第 21 号、2018、33 ページ～41 ページ
- 4) Nasrullah Munshi “Kalira and Dimna” (Persian) Translated by Wheeler Thackston, Hackett Publishing Company, Inc. 2019
- 5) 黒柳恒男「ペルシア文学におけるカリーラとディムナ」、『オリエント』、12 卷 1・2 号、1970、9 ページ
- 6) 4) と同じ
- 7) カマール・ウッディーン・フサイン・ワーズ・カーシフィー
『カリーラとディムナ』のペルシア語版で最もよく知られている『アンワールリスハイリー』(『天蓋の光』) の作者 (1505 没)
- 8) Thackston, 前掲書 xvi ページ

- 9) 英語訳では、「庭師は何等かの植物の間に草が生えたらどんな物でも必ず抜いてきれいにするのを習慣としている。」と書かれている。
- 10) ハーキム・サナーイー ペルシアの最初の本格的神秘主義詩人。